

第1回学びの多様化学校等の設置に係る検討会議における主な意見

日 時 令和8年2月4日(水) (出席委員11名/全13名)

(当日欠席の今村久美委員、小根森桜子委員には、別日に意見聴取を実施)

I 論点Iについて

No	主な意見
1	<p>「ありのままの自分」「自分らしく」の整理又は表現の変更をしたほうが良い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この表現でよいのか。 ・「自分らしく」とか「ありのまま」という耳障りの良い表現は留意する必要がある。 ・「自分が大切だと思う」「自分に自信がある」などの表現がよいのではないか。 ・「自信が持てる」「できたという実感」が主体性につながるのではないか。 ・迷いのある子どもたちにとって、「ありのまま」は大変難しい。「今の自分を受け入れてもらえる」ことが大切である。 ・自分を一人の人間として認めてもらえる学校でありたい。 ・自己受容は「人との関わり」でしか得られない。 ・「あの人」「あの先生」に出会えて関わってくれたという経験が、生きる勇気や糧になっている。 ・「自分が好きなことをやることでいい」とは違う。 ・決められた学校での生活に適應できない子どもの存在→従来の学校とは異なる学びが認められる場である。 ・少人数であることの魅力を生かすのが良い。(横+縦・ななめの関係があること) ・学校に行きたくないと思っている生徒が「行きたい」と思う学校は、本来の意味でつながることができる学校ではないか。 ・「ささえてくれる人がいるから」と思えることが大切である。 ・突飛な特徴よりは、まず場と仕組みを作ることが重要である。
2	<p>エッジのきいた内容・表現があってもよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明確に方向性を出すことが望ましい。 ・一般の学校も多くは同じ目標である。
3	<p>「学校」であり、特に「中学校」を設置することの意義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校とは、「ひとを育てる」「育てあう」場であり、学校教育は明確に組織的・体系的にできる。 ・進路実現の砦でもある。 ・「社会とのつながり」にあきらめ(かけ)ている生徒に、自分を理解してもらうことが大切である。
4	<p>中学生(当事者)の意見・思いの把握状況や長期欠席の生徒の実情を把握することが大切である。「繋がり」の押し付けに注意する。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・「人と繋がること」を強調しすぎると、負担になる生徒もいる。「楽しい」と思えるきっかけが大切である。 ・通信制があるから何とかなるという実態がある。 ・勉強につまずいている子どもが増えている。
5	<p><u>評価の視点</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ありのまま」は成長しなくてもいいという意味ではない。学校教育として〇〇な成長を期待しているなど、評価できる内容も必要ではないか。

2 論点2について（左端は、論点2のうちの1～4の内容）

内容	主な意見
2-1 環境	<ul style="list-style-type: none"> ・リラックスできる環境づくりは大切である。 ・ソファ＝リラックスではない。（落ち着ける場、面談等で活用できる場が大切） ・畳の部屋もよい。（静寂な場） ・「一人になれる空間」が必要である。誰にも見られず、クールダウンできる場所があるとよい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・まるごと在籍移行する子もいれば、在籍を維持しつつ利用する子も想定されるため、教育支援センター的機能の併設または連携が重要である。 ・可能な限りの選択肢があっても決められない実態もあり、成功体験を伴う伴走が必要である。 ・個別担任制は良いが、特定の先生に依存してしまうリスクがある。対応方法をスタッフ間で統一することが重要である。
2-1 教職員	<p>○校長は立ち上げ準備段階から関与させ、1年間かけて中身を作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校経営や運営をする人材の重要性と確実な確保をすること。 <p>○個々の教職員の資質が重要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立ち上げ期には情熱を持った人材（志望動機のある教員）を集めることが重要である。 ・当該校に立候補する形式が良い。「私たちの学校」への意識改革ができる。 ・生徒理解の資質を十分に持っていること。 ・子どもの背景を理解し、分析して対応することができること。 ・多様な子どもに向き合うたくましさが必要である。 ・コミュニケーション力があること。 ・保護者対応ができること。 <p>○教職員集団としてのチーム力が大切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任＋教職員チームでの対応や取組が大切である。 ・担任の役割がどこまでを求めるかを明確にすること。 ・スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの常勤配置が望ましい。

2-2 学び	<p>○学びのユニバーサルデザイン（授業設計の段階から多様性の対応を含める）を構想する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育の観点からも検討する必要がある。（例：ギフテッド、配慮が必要な生徒等） ・多様な子どもがいることを前提とした教育課程を編成すること。 ・それぞれの生徒の「学び」に帰着していくものにすることが大切である。 ・勉強でつまずいた子どもも一定数おり、学び直しができることがポイントとなる。 ・個別最適な学び（学力に合わせたオンライン教材・動画活用）と、集団での体験的学び（みんなで作る給食、体験活動等）の両立が有効である。 ・一人ひとりの段階的な成長を意識すること。 ・日課などをすべて短時間にすることが有効かどうかの検討が必要である。 ・「自分で自由に決める」のが苦手な生徒もいる。選択肢（ひな形）を用意する方法が効果的である。
2-2 評価	<ul style="list-style-type: none"> ・非認知能力が認知能力につながることの認識をもつ。 ・従来の形に縛られず、記述やポートフォリオで過程や成長を可視化する方向が望ましい。
2-2 給食	<ul style="list-style-type: none"> ・「みんなで机を合わせて食べる」のが苦痛な子もいる。食べる場所やスタイル（個食など）を自由に選べるようにすべきである。
2-2 通学	<ul style="list-style-type: none"> ・広い市域や保護者の状況から通学環境をどのようにするか検討は必要である。
2-3 体験	<ul style="list-style-type: none"> ・まるごとキャンパスはよい。 ・体験は主体性の育成につながることが大切である。 ・かわりを見守ってもらえる人がいることが重要である。
2-3 地域 連携	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民や地域資源（農作物提供、調理等）を受け入れるコミュニティ・スクールの運営が有効である。 ・サテライト拠点やアウトリーチを組み合わせ、取りこぼしを減らす運営が必要である。 ・地域の顔見知り関係や安心できる「誰か」がいることが、居場所化のために重要である。
2-4 ICT	<ul style="list-style-type: none"> ・対面では怖いという生徒にはオンラインの活用が有効である。 ・「授業は受けたいが、教室の雰囲気や休み時間の人間関係が辛い」という生徒にとって、オンライン配信は有効な手段である。 ・完全に「来なくていい（オンラインのみ）」にしてしまうと、結局登校しなくなる懸念がある。登校する日（スクーリング）を設けるなど、バランスが必要である。 ・オンライン同時配信は見づらさの課題がある。良質な学習動画の活用を検討する方

	が効果的である。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・情報感度の高い家庭の子ばかりが集まり、本当に支援を必要とする子が置き去りになるリスクがある。 ・多様化学校の魅力化や情報発信を行うと同時に、市全体の学校改革（誰もが行きたくなる学校づくり）を両輪で進める必要がある。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・アセスメント（生徒の状況把握）をできるだけ丁寧に行うこと。 ・不登校の背景には、発達的な課題や知的な問題が隠れていることが多い。「なんとなく学校には行きたくない」という生徒に対し、どうアプローチするかが課題である。